

紹介

● Propyläen=Welgeschichte.

Hrsg. von Walter Goetz. 10 Bde.

Welgeschichte なる名稱を以て出されるものには二通りある。一つは、一個人の手に成つたものであり、他は、多くの人々がそれ／＼その専門に應じて執筆し、これを編纂せるものである。前者の場合には一個人の手に成つてゐるため統一があるのに對し、後者の場合に於ける重なる弱點は、多くの人々に分擔されてゐる結果前後の脈絡、全體の統一の得難き事にあると云はれてゐる。然し、前者の如きものは偉大なる頭腦、豊富な知識によつてのみ生れるもので、かゝるものゝ出でる事は容易の事ではない。それ故多くの場合後者の方針が取られてゐる。而してかゝるものは各人が自己の専門の範圍を分擔し、その範圍に於けるまとまつた知識を供給し、種々なる斷面を理解せしめる事に於て存在理由を持つてゐるのである。

Propyläenも後者に屬するものである。各巻の標題を示せば次の如くである。

- 1) Das Erwachen der Menschheit.
- 2) Hellas und Rom, Entstehung des Christentums.
- 3) Das Mittelalter.

- 4) Das Zeitalter der Gotik und Renaissance
- 5) Reformation und Gegenreformation.
- 6) Das Zeitalter des Absolutismus.
- 7) Revolution und Restauration.
- 8) Liberalismus und Nationalismus.
- 9) Die Entstehung des Völkernsystems.
- 10) Das Zeitalter des Imperialismus.

Walter Goetz を中心として、G. Steinfort, J. Beloch, K. Hampe, F. Schneller, P. Joachimien, E. Muecks, W. Platzhoff, A. Stern, E. Brandenburg 等を始め多くの著名の人々が執筆してなり、全體のプランより見れば Ulstein Welgeschichte に似てなり、それを踏襲してゐる處もある。

Goetz 自身も本世界史を編纂するに際しては、かゝる種類の世界史の持つ弱點をば充分心得てなり、全體の統一に苦心してゐる。而して、かゝる目的を達せんがために彼自身各巻の始めに序論として概観をしてゐる。それは各々僅々十頁餘づゝのものではあるが全巻を通讀すれば世界史概観が完成し、Goetz 自身の世界史觀をうかがひ得るわけである。これは全體の統一のためになしたものであるが吾人には次の事を思ひ一更興味が引かれる。それは彼が未だ組織的な歴史を書かず、自傳の中で歴史を書くに急いでばならぬ事を戒め、然しながら一生の中には歴史を書く義務があり、自分は今迄これと云ふ包括的のものを書

かなかつたが、自分は決してこれに満足してゐるのではなく、他日自分に課せられたる義務を遂行する決意を持つてゐると述べてゐる事である。これと思ひ浮へるとこの序論も彼の世界史への一過程として考へられ一更興味を感じる次第である。

次にこの世界史の據つてゐる立場を考へて見るに、“die Geschichte der Menschheit von ihren dunkeln Anfängen bis zur Gegenwart als eine Einheit zu fassen” (Vorwort) であり、副題には “Der Werdegang der Menschheit in Gesellschaft und Staat, Wirtschaft und Geistesleben” である。かくの如き人類の歴史を統一的に把握せんとする事は、ゲッツの主張である

Gesamteschichte des Menschengeschlecht によつたためと思はれる。それ故内容について見ても地方、國家等を別々に取扱はず、多くは總括的な標題の下に發展の同一性に重きを置いてゐる觀がある。ことに近世以降の取扱ひに於ては從來のものが各國史に分裂してしまひ勝ちなのを改め、總括的な敘述方針を採用してゐる事は注意を引く。又これと共に政治事項より文化事項に力を入れてゐるのも一つの特色であらう。而してかゝる點は十九世紀以降の取扱ひに於て最も顯著である。

體裁を見ると敘述の他に多くの圖版、挿圖、簡單なる史料の複製等を入れてゐる。これ等の中には Dilsen などもとして作られたためか同じものも多いが、新しく加へられたものも相當ある。Dilsen 同様この點で重寶なわけである。なほ各巻の卷

末には年表をつけてゐるが、Cambridge History に於ける様なビブリオグラフィのないのが物足らぬ感じを起させる。

以上は本世界史に關する一般的特点の二三を擧げたのみである。なほ各項目の出來については熟讀玩味の上にゆづらねばならぬ。今はたゞこの新しき世界史の出現を歡び傳へるに止める。(Propyläen Verlag, Berlin, 1929—31) (鹽見)

● Ernst Kornemann:

Niebuhr und der Aufbau der altrömischen Geschichte.

本論はモムゼン、マイヤー等の歿後、古代ローマ史學界の最高峯に立てるコルネマンが、一九三一年十月六日より十日迄、ボン大學に於て開催さるべかりし第十八回ドイツ歴史學大會—或事情の爲流會となる—に發表せんとせし講演草稿の上梓されしものである。一九三一年それは彼のニーブルの死後滿百年に當る、ボン大學そはニーブルの研究奮闘の最後の場所である、コルネマンに於ては、此年、此所に、歴史に就いて論ぜんとする時、想念自らニーブルに馳り、併せて爾後のローマ史研究の發展を省みる情切なるものがあつたであらう。

本論はもとよりコルネマンの冷靜にして透徹せる理性と、古代ローマ史に對する豊富なる蘊蓄とによる、ニーブル以來百年間の古代ローマ史研究の反省と批判とを主とせるものであ